

JAWW CSW69 ユースレポーター参加報告

CSW69 参加を通しての学び

JAWW ユースレポーター 高橋里奈

このたび、CSW69 に派遣いただく貴重な機会を提供してくださった JAWW ほかお世話になった皆様に心より感謝申し上げます。以下に、CSW 参加を通して感じたことや得られた学びをまとめました。



写真：CSW69 開会式の様子 NY 国連本部において

会期中は、SRHR（性と生殖に関する健康と権利）を中心とした多様なセッションに参加しました。初日に出席したスウェーデン政府主催の「SRHR: A CRITICAL PATHWAY TO ERADICATING POVERTY AND ACHIEVING GENDER EQUALITY」というサイドイベントでは、「My body, My choice（私の身体、私の選択）」という理念に基づき、プレコンセプションケアや包括的性教育の制度化を盛り込んだ新法案が紹介されました。国家として SRHR を包括的に保障しようとする姿勢からは、「個人の尊厳」を社会の中心に据えようとする強い意志が感じられ、教育現場で私たちにできることの可能性を改めて考えさせられました。



写真：スウェーデン政府のサイドイベントの様子

また、「We Seek Partners: Annually Funded Reproductive Health Learning App」の паралレルイベントで紹介されていた、アフガニスタンなど支援の届きにくい地域を対象に開発された教育アプリの取り組みも、私に強い印象を残しました。発展途上国では、子どもたちが自分の身体について学ぶ機会が極めて限られており、その結果として性的搾取や早婚などに巻き込まれるケースが後を絶ちません。こうした状況の中で、デジタル技術を活用して子どもたちがゲーム感覚で楽しみながら、いつでもどこでも性や身体について学べるこのアプリは、SRHR(性と生殖に関する健康と権利)とテクノロジーの融合という点で非常に革新的だと感じました。

特に印象的だったのは、このアプリが「学ぶ機会そのものを届ける」ことを目的としている点です。場所や文化、経済状況に関係なく、すべての子どもたちに「自分の身体は自分で守ることができる」という意識と力を育むためのツールであることに、大きな意義を感じました。どの国に生まれても、自分の身体の権利について子どもの頃から学べる環境があるべきだという想いを、私自身も改めて強く抱きました。この取り組みは、SRHRに関する「学ぶ権利」の保障と拡大に向けた大きな一歩だと感じています。

そして、UNFPA 主催のセッション「Third Global Symposium on Technology-facilitated Gender-based Violence (TFGBV): Intersectional Challenges and Collective Action in a Shifting Digital Age」では、性と生殖に関する権利の保障がいかに女性の命と尊厳に直結するかという現実を突きつけられました。世界では、多くの国々では、女性が自らの健康に関する医療を受けるために男性の許可を必要とするという、権利が構造的に制限された現状が明らかにされました。

UNFPA の代表者がこの状況を「The manslaughter of rights (権利の無差別殺人)」と表現した言葉には、強い衝撃を受けました。それは単なる比喻ではなく、日々失われている命と尊厳、そして人間の可能性への警鐘として、私の胸に深く刻まれました。だからこそ、SRHR 関連の投資を拡充し、すべての人が自らの身体に関する意思決定を行える社会の実現に向けた取り組みが、これまで以上に必要だと強く感じました。また、包括的性教育(CSE)を通じて女性たちの SRHR に関する理解を深めていくことの重要性も強調されており、CSE は知識の提供にとどまらず、エンパワーメントの鍵となることを実感しました。

さらに EUROPEAN UNION OF WOMEN が主催する「Girls right to education and a healthy environment a lever for health, well-being and equality in society」というフランスの環境系の団体のパラレルイベントで、大気汚染による子ども・妊産婦への影響について報告がなされていました。低所得国では5歳未満の子どもの98%が、WHOの基準を超える粒子状物質に曝露されている一方で、高所得国ではその割合は52%となっているという報告がなされ、低所得（いわゆる発展途上国）の場合、開発の影響で待機中に浮遊する微細な粒子を子どもたちが吸い込み、呼吸器系の疾患（ぜんそく、気管支炎）、心血管系の病気（心筋梗塞、脳卒中）、子どもの発育への影響（肺の成長阻害、アレルギーの増加）を招いてしまい、妊産婦においても早産や低体重児のリスクが高いことが指摘をされていました。

大気汚染は「見えないから安全」という誤解が、適切な対策を遅らせているといい、実際には目に見えない有害物質が多く放出されているため、「見えない煙」の身体への影響を自分の身体を守るために子どもたちに広く教育を通して啓発していく必要があるという話がまとめとして挙げられていました。

環境教育と SRHR の関連はあまり聞く機会がないので、新しい視点を得る素敵なイベントに参加することができました。

SRHR 関連以外にもさまざまなセッションに参加させていただきました。ルワンダ政府主催のサイドイベント「Transforming Care: Progress, Challenges, and Future Directions in Men's Involvement in Care Work」では、男性の育児参加を促進するための政策や社会運動の取り組みが紹介されました。特に印象的だったのは、若い父親たちが育児に積極的に関わろうとする中で、社会的孤立を感じているという実態です。これは、日本でも共通する課題であり、ルワンダの事例を通して、自国の制度や文化についても見直す必要性を感じました。ルワンダでは現在、4か月の育児休暇制度の導入

に向けた訴訟が進められており、制度改革と文化変容の間でジェンダー平等を推進しようとする姿勢には、大きな学びがありました。

また、「World Academy for the Future of Women」のプログラムも紹介され、非常に感銘を受けました。このプログラムでは、助成金による経済的支援に加え、リーダーシップ教育を通して、受給者自身が地域や社会を変革する力を身につけることを目的としています。奨学金の支援にとどまらず、「支援された人が次に誰かを支える力を持つ」ことに重きを置くこのアプローチは、貧困の連鎖を断ち切り、持続可能なジェンダー平等を実現する上で非常に重要だと感じました。

参加者からも、「これは奨学金制度の枠を超えた、未来を変える投資だ」という声が上がっており、多くの共感を集めていたのが印象的です。また、最低 8 か月でプログラムを辞退できる仕組みがあることから、支援される側の意思決定の自由が保障されており、従来の一方向的な支援とは異なる人権尊重の視点を感じました。日本でも、大学や大学院への進学に困難を抱える女性は少なくありません。日本ではまだこのプログラムへの参加者がいないと聞き、ぜひ日本での展開もお願いしたいと最後に提案しました。

今回の CSW69(第 69 回国連女性の地位委員会)を通して強く実感したのは、「ジェンダー平等は誰か一部の人の問題ではなく、教育・医療・労働・福祉といった社会のあらゆる基盤に関わる本質的な課題である」ということです。私は教育者として、そして一市民として、教育が教室の中だけで完結するものではなく、社会と密接につながりながら再構築されるべきだという視点を、これからも大切にしていきたいと思います。

現在、私は教育現場で子どもたちと日々向き合っています。今後は、今回得た多くの学びを授業づくりに活かすとともに、包括的性教育の必修化に向けたアドボカシー活動にも積極的に取り組んでいくつもりです。子どもたちが「知らないから声を上げられない」のではなく、「学んだからこそ、自分で考え、選び、声を上げられる」ような環境を、教育現場から一歩ずつ着実に築いていきたいと、心から思っています。

今回 CSW69 に参加できた経験を次世代のジェンダー平等と一緒に担う子ども達に伝えられるような教員になれるよう、日々の仕事に今後も精進してまいります。

この度は貴重な経験をいただきまして、ありがとうございました。